

# 地域活性化という「遊び」

41

京都市  
福知山市 「みわ・ダッシュユ村」から

山本晋也

先 月書かせていただいた  
我が家の子供たちが

香川の友達と試行錯誤のうえ開発した「うー麺」。

イベントでのお披露目の日が迫ってきました。

その香川の子たちや他の子たちも

イベント当日はもちろん



若いスタッフたちと出演者さん。

知山に来て

いろいろ準備を手伝ってくれることになりました。

彼らは今まで何度となく

鹿をさばいたり料理をしたり革細工をしたりと

自分たちが楽しむために集まったこと

とはありましたが

今回はちょっと違って

自分たちが楽しむだけではなく

お客さんも楽しませなければなりません。

僕自身

ここに集まってくる子供たちに

そろそろそういう楽しみもわかるよ

うになって欲しい

と思っていたところだったので

今回は絶好の機会。

## 接客を通して見つけた 子供たちの新しい楽しみ

イベントでお客さんを楽しませると

いうのは

単純に美味しい料理を作るだけでは

ありません。

イベント用にお店を飾りつけたり

初めて来られるお客さんの駐車場か

らお店までの誘導や

トイレ等の案内板の設置など

考えなければならぬことは山ほど

あります。

大人がどんどん指示を出して子供た

ちにどんどん動いてもらえば

スムーズで早いのですが

今回は一緒に考えながらやってみま

した。

まずは駐車場の場所を示す看板

を立ててもらおうことから始め

たのですが



農業倉庫を利用したイベントスペース。  
照明など工夫して雰囲気抜群でした。

### 筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダッシュユ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人々が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダッシュユ村副村長。

彼らが立ててくれた看板を自分たちが初めて来られるお客さんのつもりになって車に乗せ実際に車を走らせて確認してみると目の高さが違うので車からは見えにくかったり駐車場から出る時今度はその看板が視界を遮り安全確認の邪魔になっていたりしていて案外難しいものです。駐車場からお店までの通路も実際に



レストランも大賑わい。「うー麺」好評でした。



コーラスに集まってくれた子供たち。素晴らしく元気です。



イベント翌日のスタッフ朝ご飯。  
仕事をやりきった後のご飯はとても美味しかった！

歩いて確認してもらいましたが  
当日晴天とは限らないということで  
雨の日にもう一度確認。  
やはり思わぬところに  
水たまりができた  
滑りやすい場所があったりします。  
そしてお客さんは  
お年寄りかもしれないし  
ベビーカーが通るかもしれない。  
あらゆるケースを想像して考えてみ  
るのはとても面白い経験だったと思  
います。

**イ** ベントに来るのはお客さんだ  
けではなく  
出演者さんもいます。  
こちらもただ演奏していただくだけ  
ではなくて

どうやったら出演者さんが楽しく演  
奏してもらえるか  
みんなで考えました。  
会場はもともと農業倉庫ですから  
ホールのような照明器具はありません  
が  
スイッチ付きのコンセントを使い  
音楽に合わせて  
ライトを手動で点滅させれば  
なかなか雰囲気が出ます。  
極め付けは、ライブで歌を聴かせて  
もらうだけではなく  
お客さんも一曲一緒に歌ってしまお  
うという案が出て  
常連さんの子供たちにも声をかけ  
急遽コーラス隊を結成。  
イベントの数日前に  
「歌の練習会！ 美味しいカレーを  
振る舞います！」と声をかけると  
あっといいう間に30名を超える子供た  
ちが集まってくれました。  
当日はコーラスの子供たちも  
聞くだけでなく自分たちも参加する  
喜びを見つけて大いに盛り上がり  
出演者さんも  
「この10年で最も思い出に残る大変  
良いライブになった」と  
涙を滲ませるほど喜んでいただけま  
した。  
そして小学生から18歳まで  
たくさん集まってたくさん考えて  
たくさん体も動かして

さすがに疲れただろうなと心配して  
いた若いスタッフのみんなも  
よほど楽しかったのか  
「次回のイベントも絶対手伝いたい」  
と素晴らしい笑顔で答えてくれまし  
た。

**中** でも特に嬉しかったのが  
スタッフの中に人と話すのが  
苦手な15歳の男の子がいて  
当日ちよっと心配していたのですが  
その子が帰り際  
「生まれて初めて接客が楽しいと感じ  
ました。ありがとうございます！」  
と目を輝かせて帰って行きました。  
他のスタッフの子たちに聞くと  
その子は人が変わったように  
生き生きとドリンクの注文を聞くだ  
けでなく  
色々会話までしていたそうです。  
苦手を克服したというより  
自分の中で新しい楽しみを見つけた  
のでしよう。  
僕も今回  
お客さんの笑顔、出演者さんの笑顔、  
スタッフの笑顔と  
全てにおいて本当に楽しませてもら  
いました。  
人を楽しませるといえるのは本当に面  
白い遊びです。  
次はおばあちゃんたちが楽しみに待  
っている集落の夏祭り。  
さあ何しようかな！